

未来を語る人

ジャレド・ダイヤモンド Jared Diamond

ブランコ・ミラノヴィッチ Branko Milanovic

ケイト・レイワース Kate Raworth

トーマス・セドラチェク Tomas Sedlacek

レベッカ・ヘンダーソン Rebecca Henderson

ミノーシュ・シャフィク Minouche Shafik

アンドリュー・マカフィー Andrew McAfee

ジェイソン・W・ムーア Jason W. Moore

大野和基編 Ohno Kazumoto

はじめに

いま私たちは、先の見通せない迷路の中で、出口へ通じる道を探しています。

地球温暖化による気候変動、予測不能な感染爆発、世界を分断へと導く国際紛争……。

私たちが直面している問題は、もはや一つの国や地域で解決できる問題ではありません。さらに、数年間にわたって地球を席卷した新型コロナウイルス感染症のパンデミックは、それらの問題解決を阻む、根本的な問題を浮き彫りにしました。それは、世界に広がる「格差」です。

それまでも存在していたけれど、多くの人が真剣に対峙してこなかった、あるいは手をこまねいていた、国家間の、民族間の、職業の、性の、世代の、ありとあらゆる格差が、未曾有のパンデミックによって白日の下に晒されたのです。そして、その格差が資本主義の誕生から何世紀にもわたって解消されなかったことに、そもそもその格差こそが資本主義の本質であったことに、多くの人があらためて気づいたのです。

これらの根本的な格差を解消しようとする真摯な論考の中で、そして、一刻の猶予もないと言われる気候変動問題を解決するための様々な議論の中で、従来型の資本主義に懐疑

の目が向けられています。資本主義というシステムを無批判に信奉しては、世界は袋小路に入ってしまったのではないか。新たなコミュニケーションなど別のシステムを考えるべきではないか。そのような声が、長く資本主義を奉ずる欧米、そして日本の中からも上がっているのです。

本書は、数十年にわたり世界の学者、研究者などにインタビュしてきた国際ジャーナリスト、大野和基氏が、世界がコロナ禍に沈む数年間にわたり、世界の学者八人にインタビューした内容をまとめたものです。第一章の地理学者、ジャレド・ダイアモンド氏をはじめ、いま世界で最も注目されている経済学者たちに、従来型の資本主義をどのように捉え、改善し、改革していけば、あるいは別の考え方を取り入れれば、未来社会をより良いものにする事ができるのか、じっくりと訊いています。

世界が直面する難問を解決するため、来たるべき社会で多くの人が幸福に過ごせるようにするため、いま私たちが何をすべきか、何ができるのか。彼らの答えは千差万別ですが、多くの示唆に富んでいます。ここに迷路を抜け出す道が見つかるはずです。

インターナショナル新書編集部

目次

はじめに

第1章

ジャレド・ダイアモンド

「いま人類が直面する、最大の危機」

9

第2章

ブランコ・ミラノヴィッチ

「二つの資本主義が世界を覆う」

41

第3章

ケイト・レイワース

「世界中の人をドーナツの中に入れる」

67

第4章

トーマス・セドラチエク

「倫理と経済、どちらが先か？」

93

第5章

レベツカ・ヘンダーソン

「資本主義を再構築する」

117

第6章

ミノーシュ・シヤファイク

「社会契約をつくり直す」

139

第7章

アンドリユ・マカフィー

「資本主義は『脱物質化』する」

165

第8章

ジェイソン・W・ムーア

「生命の網のなかの資本主義」

189

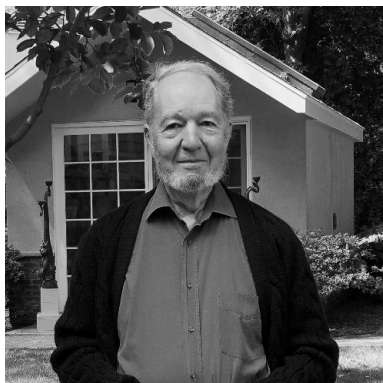
あとがき

214

第1章

いま 人類が直面する、 最大の危機

ジャレド・ダイヤモンド



カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) 地理学教授。1937年、ボストン生まれ。ハーバード大学で生物学、ケンブリッジ大学で生理学を修める。研究領域は進化生物学、鳥類学、人類生態学など多岐にわたる。カリフォルニア大学ロサンゼルス校医学部生理学教授を経て現職。アメリカ科学アカデミー、アメリカ芸術科学アカデミー、アメリカ哲学協会会員。著書に『銃・病原菌・鉄』『文明崩壊』(共に草思社)、『昨日までの世界』(日経BP) など多数。アメリカ国家科学賞、タイラー賞、コスモス賞、ピューリッツァー賞などを受賞。



『危機と人類 上・下』

ジャレド・ダイヤモンド 著

小川敏子／川上純子 訳

日経ビジネス人文庫

近代国家は、迫りくる危機をどう乗り越えたのか、あるいは乗り越えられなかったのか。著者が知悉するフィンランド、日本、チリ、インドネシア、ドイツ、オーストラリア、アメリカの7カ国（日本以外は在住経験あり）を例に詳述、その成功と失敗の理由を探り、人類が危機にどのように対処すべきかを論じる。臨床心理士の危機療法をヒントに個人的危機の解決法を国家的危機に応用して分析し、現在進行形の危機への対応策を探っていく。

——ウクライナで起きていることについていかがいます。あなたの著書『危機と人類 (UP-HEAVAL:Turning Points for Nations in Crisis)』の中に「歴史家が長きにわたり議論しつづけているふたつの考え方がある。非凡な指導者たちが実際に歴史の流れを変えたのか、他の人が指導者だったとしても歴史は似たような結末だったのか」というくだりがあり、そこにヒトラーの例を引いています。もし、ロシアの指導者がウラジーミル・プーチンでなかったら戦争は起こっていなかったでしょうか？あるいはウオロディミル・ゼレンスキーがウクライナの指導者でなかったとしたら、どうだったでしょうか？

ジャレド・ダイヤモンド（以下ダイヤモンド） 多くの人は、「指導者は歴史の流れを変えるのか」という疑問に、単純な答えを求めようとします。答えは、時には歴史の流れを変え、時には変えないというものです。指導者は、非常に異なる選択肢がある場合、歴史の流れを変えます。何をすべきかについて国全体が同意している場合は、歴史の流れを変えません。また指導者が大きなパワーをもっているとき、指導者が独裁者であるとき、あるいは民主主義国家でも戦時には指導者は歴史の流れを変えます。平時の民主主義国家では、リーダーはあまり歴史の流れを変えません。ロシアは独裁国家で、プーチンはすこぶる際立っています。あなたはプーチンに会ったことがありますか？

——いいえ、ありません。

ダイヤモンド プーチンはナポレオンと同様の身長コンプレックスをもっています。最初は理性をもって話しますが、こちらが気に入らないことを言うと、顔を真っ赤にして憤慨する。プーチンは、紛れもない独裁者で、歴史の流れを変えることは間違いありません。ゼレンスキーについてはあまり言えることはありませんが、プーチンは確かに歴史の流れを変える人物です。

——ドナルド・トランプ前大統領は、いかがでしょう。

ダイヤモンド トランプは確かに歴史の流れを変えました。ほとんどこの点で悪い方向です。今の状況でトランプならどうするでしょうか？ 非常にバカげたことをするでしょう。どんなバカげたことをするのか、そこまで具体的にわかりませんが。

——二〇二二年二月に行われた世論調査によれば、アメリカ人の六〇パーセント以上は、もしトランプがアメリカの大統領であれば、ウクライナ戦争は起きていないという意見でした。

ダイヤモンド 大統領選でトランプに投票したアメリカ人の割合は四九・五パーセントでした。トランプに好意的な見方をしているアメリカ人の割合はそれから減少して、今は四

○パーセントくらいです（二〇二二年七月現在）。「六〇パーセント以上」という世論調査の結果を、私は疑いますね。実際は三〇パーセントか四〇パーセントくらいだと推測します。危機への対応はフィンランドに見習うべき

——あなたは、『危機と人類』の中でフィンランドに一章を割いています。人口六〇〇万人の小国フィンランドは、ソ連との苦い経験から「ソ連とのあいだでふたたび紛争が起きた場合は支援が期待できないのだから、むしろ自国の独立をできるだけ保持するかたちでソ連との関係を発展させるしかない」と考えていると、あなたは書いています。二〇二二年五月、フィンランドはNATOに加盟申請しました。フィンランドにとって大きな決断ですが、これは賢明な選択だったのでしょうか。

ダイヤモンド フィンランドは歴史から学び、常に賢明な決定をしています。フィンランド人は「冬戦争（一九三九年一月から一九四〇年三月まで続いた、フィンランド対ソビエト連邦の戦争）」から多くのことを学びました。

私が前回フィンランドを訪問したとき、政府委員会のメンバーである友人に、「うまくいかないかもしれないすべてのことを予測し、それに対して備えることを対ソ戦争から学

んだ。政府委員会を設置し、月例で会合をもち、常に悪い事態が起ることを予測して備えている」と言われました。例えば、送電網が切断されたら、何が起きるかを予測し、対策を講じるなどです。実際にロシアはウクライナ侵攻でフィンランド向けの電力供給を停止しましたが、フィンランドではすでにそれに対する備えができていました。

三年前（二〇一九年）、この委員会で呼吸器系統の世界的なパンデミックが起きたらどうなるかという事態の予測をしたそうです。明らかにマスクが必要になりますね。だからフィンランドは三年前にたくさんのマスクを購入していました。新型コロナウイルスが現れたとき、フィンランドには十分なマスクの備蓄があったのです。彼らは燃料を備蓄し、小麦、医薬品、化学製品などありとあらゆるものを備蓄しています。例外はありません。フィンランドは、一九四五年以来、何十年も、慎重の上にも慎重に、中立を維持してきました。しかし、今ロシアがやっていること（ウクライナ侵攻）を目の当たりにして、中立を維持することは賢明なことではないと判断したのです。

——あなたは、「大国に脅かされている小国はつねに気を配り、別の選択肢を考慮し、選択肢を現実的に見極めるべきだ」と書かれています。その教訓を「一九四一年には日本が無視して、アメリカ、イギリス、オランダ、オーストラリア、中国を同時に攻撃し、ロシ

アと敵対した」とも書いています。ロシアと中国による威嚇とも思われる日本の領海への船舶の侵入が日本でニュースになりましたが、日本はアメリカに頼るといふ選択肢しかないのでしょうか。

ダイヤモンド 第二次世界大戦の劇的な出来事の一つにドーリットル空襲があります。真珠湾攻撃のあと、アメリカ人は士気阻喪しきそぼうしていました。ルーズベルト大統領は国民の士気を高揚させるべく、何か手を打ちたかった。アメリカ軍は、一九四二年四月一八日にアメリカ陸軍航空軍の爆撃機によって東京に空襲（ドーリットル空襲）を実施しました。物質的なダメージはとるに足らないものでしたが、この初の東京空襲に反応して、山本五十六海軍大將はミッドウェーを攻撃し、それが日本にとって悲惨な結果を引き起こしました。

挑発されたときに熟慮せず即座に反応して起こす行動が大きな失敗に繋がるのです。長つたらしい答えですが、挑発に乗らないで何もしないほうが状況がよくなる場合があるということです。ロシアや中国の船舶が日本の領海に侵入しても、別に北海道に侵攻しようとしているわけではありません。勝手にうろつき回らせておけばいい。私なら別に騒ぎません。

——威嚇されていると感じる日本人もいますが、そう感じる必要はないということですね。

ダイヤモンド　そうです。現実的には、それはデモンストレーション、単に見せつけているだけです。心配することはありません。

アメリカ国内の二極化で、民主主義は崩壊するかもしれない

——アメリカが今日直面している喫緊の課題は何でしょう。

ダイヤモンド　私はロシアのことも中国のことも心配していません。私が危惧しているのは、アメリカ国内の二極化です。

——よくニュースになる人工妊娠中絶論争ですね。

ダイヤモンド　中絶論争はアメリカ人が最も二極化している問題の一つです。中絶は多くの方が非常に強硬な意見をもっている問題で、だから注目を浴びています。アメリカ人の五一パーセントほどが女性で、その女性たちの多くは、今年（二〇二三年）六月の最高裁の判決に憤慨しています。九人の判事のうち五人は男性で妊娠することがないので、こんな信じられない決定を出したのです。実際、最高裁で保守派の判事が多数派となったことが大きいと思います。トランプによって三人の保守派判事が選ばれてからは、こうなるのは時間の問題でした。

私がアメリカの二極化の中で本当の問題だと考えるのは、「投票制限」です。これが、民主主義を終わらせるかもしれないかもしれません。アメリカがこれから四年以内に民主主義国家でなくなり、事実上独裁主義国家になる可能性が高いと私は見えています。

民主的な選挙が行われない政府のシステムは独裁主義です。すでに個々の州の地方自治体や州当局では、「民主的な選挙」が崩壊の危機に陥っています。アメリカでは国政選挙を管理する国家機関は存在しません。あくまでも地方自治体と州がルールを設定します。しかし、共和党が多数派を占める州では、地方自治体と州の当局は民主党に投票しそうな人が投票するのをかなり難しくするか、事実上不可能にしているのです。

共和党は投票所に行く自由を制限しようとしています。民主党支持者たちは一丸となつて、それに反対しています。すでに多くの訴訟が起こされています。国、つまり政府が大きな権限をもつ日本と異なり、我々の連邦政府のもつパワーは限られています。五〇の州は連邦政府に対して、日常的に訴訟を起こしています。そうした訴訟が、連邦政府が行動を起こすのを遅らせたり、妨げたりしています。

アメリカが民主主義国家でなくなることだけは避けたい。民主主義は最善の政治形態です。民主主義では、政府がバカなことをすると、国民は抗議することができます。もちろ

ん抗議運動をすることで警察に撃たれることもあるでしょう。でも最終的には、政府が変わらざるを得ないことも起きます。イギリスでボリス・ジョンソン首相が辞任すると誰が想像したでしょうか？

アメリカ市民の間でベトナム戦争への反対運動が激しくなっていた一九七〇年、オハイオ州でアメリカ州兵が学生に発砲、殺傷するという事件が起きました（ケント州立大学銃撃事件）。射殺された学生たちの写真は全米に報じられ、それがやがてアメリカ政府がベトナム戦争継続を断念することに繋がりました。

特定の宗教が、科学への懐疑主義を生む

——アメリカで科学への懐疑主義が広がっているのは、なぜなのでしょう。

ダイヤモンド それはとても興味深い問題で、まさにパラドックスです。アメリカは科学の分野で世界のトップです。そのことはアメリカが受賞した科学分野でのノーベル賞の数が、他を圧倒（二位のイギリスの三倍以上）していることでもわかります。他方でアメリカは、裕福な民主主義国家の中で科学に対する懐疑主義が最も強い国でもあります。このパラドックスはどのように説明できるでしょうか。

私は、UCLA 宗教研究センターにいる友人と今、共同研究をしています。このパラダイクスの要因はいくつか考えられます。

一つ目は、歴史的な経緯です。第二次世界大戦の前までは、科学分野で世界のトップの座にいたのはヨーロッパでした。ノーベル賞もヨーロッパ人が多く受賞していました。アメリカが科学分野で世界のトップになったのは、第二次世界大戦中、そして戦後になってからと比較的新しいことなのです。

二つ目は、アメリカの宗教です。科学に反対する懐疑の声は、特定の宗教、つまり福音派キリスト教原理主義プロテスタントの人から上がっています。彼らは科学を信用する代わりに、聖書に書かれていることを信用しています。アメリカでは、この福音派プロテスタントが他の先進国よりもはるかに強い力をもっています。ただ、これだけで、懐疑主義の強さをすべて説明することはできません。

今のアメリカは普通の民主主義ではなく、ハイパーデモクラシー（過度な民主主義）です。つまり、どんなに無教養な人でも科学的なことについて科学者と同等に自分の意見を言う権利がある、と信じているのです。これは、ときに良い結果をもたらすこともあるのですが、とても悪い結果をもたらすこともあります。

——『危機と人類』のキーワードに「選択的変化」があります。人でも国家でも危機に直面したときに、「機能不全で変えなくてよい部分と、機能不全で変えなければならない部分との分別」が重要であるというのですが、このアイデアはどこから来たのでしょうか。あなたが精通している比較研究からですか。

ダイヤモンド あなたは先ほど、私の妻マリーに会いましたね。彼女は臨床心理士です。私はいろいろな国で暮らし、国家が危機に遭遇するのをこの目で目撃してきた経験があります。と同時に、臨床心理士として問題のある患者を治療してきたマリーと四四年間、生活を共にしてきました。心理療法の真髄は「選択的変化」です。これは、自分のすべてを捨てさるのではなく、自分の中で機能不全になって変えなければならない部分を見極めることです。

実際のところ、マリーに診てもらうために入ってくる新しい患者を見ると、人生においてすべてのことがうまくいっていないと感じているらしく、沈み込んでいることが往々にしてあるのです。そういう気持ちのまましていると、患者は自分が抱えている問題に対処することができません。マリーの最初の仕事は、患者が変えなければならないことを見極めるのを手助けすることなのです。それ以外のことはうまくいっていますよ、と気づいても

らうのです。必要なことは「選択的変化」だけであることに気づかなければ、問題に打ちめされたままになり、手を付けられない状態になります。

それと同じことが国にも当てはまります。国にはさまざまな問題があり、時には打ちめされて、何もかもうまくいっていないと思ってしまうです。でも、もしその国が圧倒された状態になると、市民は絶望的な気持ちになり、自分たちに何ができるか当惑してしまいます。アメリカには大きな問題があります。日本も問題がないわけではありません。でも日本やアメリカには、うまくいっていることもたくさんあるのです。

日本はさまざまな問題を抱えています。アメリカよりはるかに格差が少ないです。また公教育が受けられるレベルについてもアメリカより日本の方がはるかに公平な機会があります。農村地域でも日本ではいい教育が受けられます。社会契約（国家とその市民の関係についての契約）に関してもアメリカより日本の方が優れています。日本ではマスク着用について政府が市民に命令を下しません。それでもみんなマスクを着用します。アメリカでは政府が命令しないと市民はマスクを着用しません。もちろん日本にも「選択的変化」が必要な領域がありますが、何もかもうまくいっていないと感じる必要はありません。アメリカについてもそうです。何もかもうまくいっていないと感じる必要はないのです。長

つたらしい答えですが、私の経験と妻の経験から、「選択的変化」についてのアイデアを思いつき、『危機と人類』を執筆したのです。

危機を乗り越えた理想の例は、日本の明治維新

—— 国家の危機を乗り越え、繁栄に繋げた理想的な国を一つ挙げるとしたらどこでしょうか。

ダイヤモンド 明治時代の日本です。近代における「選択的変化」の最も優れた例と断言していいでしょう。私の『危機と人類』は、日本について二章を割いています。

—— 私は生まれていませんでしたが、その明治時代の日本について詳しく説明してください。

ダイヤモンド 私も生まれていませんでした（笑）。明治時代は、ペリーが来航し、多くの日本人がもう鎖国を維持することができないと気づいたことで始まりました。そこでさまざまなことが変化せざるを得ませんでした。さもなければ日本は中国と同じ運命を辿っていたでしょう。日本は西洋に対抗できる戦力をもつ必要に迫られました。また、西洋の制度を採り入れることで、西洋人の目に尊敬すべき国であるように映るようにしたのです。

実際、日本はとても巧妙に西洋スタイルの制度を採り入れました。

当時、世界最強の海軍はイギリス海軍だったので、日本はイギリスから海軍のアドバイザーを招きました。さらに、日本で最初の超弩級戦艦である金剛の建造を、イギリスの造船会社に発注したのです。戦艦金剛が日本に届くと、それをモデルとして戦艦比叟、戦艦霧島、戦艦榛名などを国内で造りました。

また、当時世界最強の陸軍はプロシア軍、つまりドイツ軍でした。なので日本陸軍は、ドイツから兵学教官を招きました。

教育制度について日本はさまざまな試行錯誤を重ねました。最初はアメリカ式の教育システムを試しましたが、うまくいかない部分もあったので、他の国の教育システムも試しました。

憲法の形式については日本には天皇がいて、その伝統もありますから、最適なモデルはドイツの憲法であると判断し、ドイツから二人の憲法専門家を連れてきて、二年間日本に住んでもらい、大日本帝国憲法草案の作成を手伝ってもらいました。それで日本は立憲政治の国になったのです。天皇に役割を与えた憲法をもち、中央集権の政府を確立したことで、西洋人の目に、日本は尊敬すべき国であると映ったのです。

一九三〇年代の日本は、なぜ失敗したのか？

——あなたは日本の明治維新を評価する一方、一九三七年に始まる日本の侵略戦争、日中戦争から第二次世界大戦での判断の誤りを分析しています。その原因を、「若き急進派将校たちは、アメリカの工業力や軍事力を直接見聞きしたことがなかった」ことだと分析します。明治時代の指導者と、一九三〇～四〇年代の指導者の違いが、日本の運命の分かれ道だったということですね。日本の成功と失敗の分析を踏まえ、現在の日本の状況をどう評価されますか。

ダイヤモンド 現在の日本にも問題がありますが、一九三〇年代の問題と比べるとるに足りない問題です。その時代、日本の基本的な問題は何だったのでしょうか。

一つはあなたが今言ったように自国のパワーを見誤ったことです。私が初めて日本を訪れた一九八八年、日本での晩餐会のこと。ゲストの一人に、一九三〇年代にアメリカで数年間を過ごした、日本の鉄鋼会社の元トップがいました。彼は私に、当時アメリカが高品質の鉄鋼を生産する能力は、日本の五〇倍あったと語ってくれました。日本がアメリカに勝ちようがないことを、彼は戦争の前に知っていました。

しかし、日本の陸軍将校は、ドイツのことしか知らず、アメリカの本当のパワーを認識

していませんでした。連合艦隊司令長官だった山本五十六は、かつて大使館付き海軍武官としてワシントンに一年間駐在するなど、アメリカを熟知していましたから、彼の日本政府に対する最初の進言が、「お願いだから、アメリカと戦争をしないでくれ」でした。

もう一つは興味深い問題ですが、あまり議論されていません。それは、人はアナロジー（類推）で行動してしまうということです。過去に成功した経験があると、類似した状況下ではそれに頼って同じ行動を繰り返してしまうのです。一九〇四年の日露戦争では、日本はロシアに勝ちました。ロシアに勝ったことで、アメリカにも勝てるだろうと期待してしまつたのです。

これらの戦争では二つの決定的なことがあります。日本はまず宣戦布告をしないで、仁川沖海戦でロシア艦隊を攻撃し、これを撃沈しました。ロシアの場合は、ロシア政府が独裁政権で、ロシア人が激怒しなかつたのでうまくいきました。そこでアメリカへも、ロシアへの攻撃を手本にして真珠湾攻撃をしたのです。この真珠湾で日本の敗北は決まつたと言えるでしょう。私の父親は——私の姉や私もまだ若かつたですが——自ら進んで戦争に行きました。日露戦争のやり方を真珠湾攻撃にもち込んだことが、破滅的な結果を招いたのです。

もう一つのアナロジの失敗は、日本海海戦です。この戦いで東郷平八郎はロシアのバルチック艦隊を壊滅させました。日本がそこから学んだ教訓は、「艦隊決戦主義」という考え方です。これは戦争における決定的な海戦で敵艦隊を撃滅し、制海権を得たものが戦争に勝てる、というものです。そこで日本の連合艦隊は、真珠湾攻撃で撃ち逃したアメリカの空母を誘い出し、撃滅することにこだわりました。

これは失敗でした。もし日本が艦隊決戦の時期を待つことなく、ソロモン海戦で艦隊を動かしていたら、ガダルカナルでの反撃を打ち負かすことに成功していたかもしれません。この二つはアナロジがうまくいかなかった顕著なケースです。

——日本で語られている歴史とは違う捉え方ですね。あなたはまた、「なぜか日本では見過ごされ、議論もされていない。あるいは問題の存在すら否定されている」問題がある、と書いています。この、深刻な問題とは何でしょうか。

ダイアモンド 順不同で、巨額の国債発行残高、少子高齢化、女性の社会進出の遅れ、移民を受け入れないこと、中国・韓国との緊張関係の原因である歴史問題の否定があります。特に女性の社会進出は、女性の活躍の場が増えたといっても欧米に比べるとまだまだです。これは政府が方針や法律を作ってもなかなか変わりません。経営者側の女性の役割に対す

るマインドセットを変えるしかありません。

移民の受け入れは、日本が独自に判断すべきこと

——移民についてうかがいます。世界のグローバル化に伴い、移民はこれからも増え続けていくのでしょうか。

ダイヤモンド ヨーロッパではそうです。ウクライナから六〇〇万人の移民を受け入れてあります。アメリカは移民受け入れ数をまだ増やしていません。ロシアのウクライナ侵攻によって移民が外に送り出されていますが、アメリカではなくヨーロッパへの移住です。世界全体の傾向でいうと、グローバルゼーションによって、すべての裕福な国は受け入れる移民の数を増やしています。この流れを抑えるのは難しいです。五〇年前、貧しい国の人には裕福な国の状況をあまり知りませんでした。今、彼らはスマホやテレビを持ってます。また五〇年前、貧しい国ではジェット機もほとんど飛んでいませんでした。今は助けがあれば貧しい国の人でもジェット機で裕福な国に行くことができます。アメリカやヨーロッパにとって、これは重大な問題です。オーストラリアでも問題になってきています。日本にとってはまだ問題になっていませんね。

——貧しい国の人たちも比較的容易に、遠い裕福な国に移動できる時代になったのですね。ご存じのように日本はウクライナで起きている戦争で生じたウクライナ避難民をほんのわずか受け入れました。でも日本はアメリカやヨーロッパと比べると移民を受け入れることに前向きではありません。今の状況を考えると、日本はもっと進んで移民を受け入れるべき (should) でしょうか。

ダイアモンド あなたは今 should という単語を使いましたが、誰も日本に対して移民をもっと受け入れるべき (should) かどうか言うことはできません。日本人が移民に対して抵抗感をもつには理由があります。日本は他の国と非常に異なった国で、比較的均質な社会です。移民の歴史もありません。

対照的にアメリカでは、どのアメリカ人も例外なく移民です。アメリカ先住民も一万三〇〇〇年前に移住してきました。他のアメリカ人は一六〇七年に移住を開始しました。私の父親は二歳のときにアメリカに移住してきました。私の妻の両親も移住してきました。私の友人のほとんども移住してきました。自身が移住してきた人もいれば、親や祖父母の代にこの国に移住してきた人もいます。

アメリカはこのように移民の国です。日本は移民の国ではありません。アメリカは入っ

てくる移民に対応する歴史がありますが、日本にはそれがありません。だから日本がどうすべきかを誰も日本に言うべきではありません。日本は日本にとってベストであると思う選択をするべきです。

地理的な条件は、国の発展にどれだけ影響するか

——日本が大陸から離れた島国であることが、大国に攻撃されにくく、異民族の流入も少なかったという歴史に繋がりました。地理的な条件とは国家にどれほど影響を与えるのでしょうか。

ダイヤモンド その質問は、結婚において女性のどこが男性を幸せにするか、という質問と同じです。結婚において男性を幸せにする女性の特徴はたくさんあります。それと同様に国に影響する地理的な特徴はたくさんあります。日本は海に囲まれています。アメリカも海に囲まれています。日本は温帯地域にあります。それは熱帯病のリスクが低いことを意味します。アメリカも温帯地域にあります。日本は多湿で火山が多く、土壌は非常に肥沃です。アメリカは局所的に多湿で、火山は少ないですが非常に肥沃な土壌です。日本とアメリカは共通のアドバンテージをもっているのです。

未来を語る人

ジャレド・ダイヤモンド／ブランコ・ミラノヴィッチ／ケイト・レイワース／トーマス・セドラチェック／レベッカ・ヘンダーソン
／ミノーシュ・シャフィク／アンドリュー・マカフィー／ジェイソン・W・ムーア

大野 和基 編

発行：集英社インターナショナル（発売：集英社）

定 価：990 円 (10%税込)

発売日：2023 年 8 月 7 日

ISBN：978-4-7976-8127-7

ネット書店でのご予約・ご注文は [こちらからどうぞ！](#)